

# 韓国の説話にみる死者と生者の主導権

## 日本の説話との比較と通じて

The initiative between the dead and the living in Korean narratives  
Through comparison with Japanese narratives

川上新二

KAWAKAMI Shinji

### Abstract

Through a study of Japanese narratives, one scholar states that Buddhism has given the Japanese the idea that the living is superior to the dead and has the initiative in the relationship between the dead and the living through memorial services. In this article, we consider the relationship between the dead and the living in Korean narratives. In the narratives compiled during the Goryeo era when Buddhism prospered, the living take the initiative, as in the Japanese narratives. However, in the narratives of the Joseon era, when Buddhism was rejected and Confucianism was emphasized, on the contrary, the dead take the initiative.

Keywords：死者、生者、主導権、仏教、追善廻向（供養）

### 1. はじめに

先学は仏教説話の考察を通じて、日本に伝来した仏教が日本人に及ぼした影響の一つとして、死者に対する生者の優位性が日本人の思考にもたらされたと指摘している。それまで怨霊などに代表されるような怨みを抱いて生者に禍を及ぼす恐ろしい存在とされた死者が、仏教が説く因果応報（善因善果、悪因悪果）、輪廻転生（後生善処）、追善廻向（供養）の論理によって、自身が犯した悪行や執着のために地獄や畜生道で苦しむ存在であり、その苦しみを脱して天界などへ再生するためには生者に追善廻向（供養）を依頼しなければならない憐れむべき存在であるとみなされるようになったと説く。すなわち仏教は、死者を生者に助けを求めなければ救われない存在であるとし、生者が死者よりも優位に立つという考え方を日本人にもたらしたというのである<sup>1</sup>。

韓国も仏教が伝来した地域であり、新羅王朝（高句麗、百済との三国鼎立時代 356～676、統一新羅時代 677～935）や高麗王朝（918～1392）では仏教が栄えた。他方、朝鮮王朝（1392～1910）では仏教は排斥され、儒教が国学、国教とされて人々の生活や思考に大きな影響を及ぼした。

本稿では、仏教が日本人の思考に及ぼした影響に関する先学

の指摘を参照しながら、韓国の説話にみられる死者と生者の関係について検討する。

先述したように先学は、仏教は日本人に、死者は生前に自ら犯した罪のために苦しんでいる存在であり、その苦しみを免れるためには生者に追善廻向（供養）をしてもらわなければならない、生者は死者を救ってやることできるという思考、すなわち生者は死者よりも優位に立つという思考をもたらしたとする。本稿ではこのような関係を死者よりも生者に主導権がある関係としてとらえる。それに対して、死者は怨みを抱いて生者に禍をもたらす恐ろしい存在であるとされるような、生者に対する死者の優位性が認められる関係を、生者よりも死者に主導権がある関係としてとらえる。そして生者と死者のどちらに主導権が認められるかという視点から、韓国の説話にみられる生者と死者の関係を考察する。

### 2. 高麗時代の説話にみる死者と生者の関係

#### （1）冥界を訪れた者に救済を依頼する死者

仏教が栄えた新羅王朝や高麗王朝での仏教の様相を伝える説話集として、高麗時代の僧・一然（1206～89）が編纂した『三国遺事』がある。『三国遺事』が伝える説話の多くは新羅王朝期を背景にしたものであるが、編纂は高麗時代であり、ここでは同書を新羅から高麗にかけての死者と生者との関係をみる資料としてとりあげる。『三国遺事』巻5「感通」には「善律還生」

<sup>1</sup> 池上良正『増補 死者の救済史 供養と憑依の宗教学』（ちくま学芸文庫）、筑摩書房、2019年。

と題する次のような話がある。

新羅の望徳寺の僧・善律は大般若経 600 巻の書写を始めたが、それが終わらないうちに冥界の使者に捕らえられて冥界に行った。冥界の役人から「お前の寿命は尽きているが、経典の書写を完成させるという素晴らしい行為が終わっていないので、再び人間界に戻ってそれを終わらせるように」といわれ、放免された。善律はこの世に戻る途中、一人の女に会った。女は泣きながら「私は、父母が寺の水田を盗みとった罪に連座して冥界に捕えられてきて、長い間苦痛を受けている。師が人間界に戻ったら、私の父母に早くその水田を寺に返すようにしてほしい。また、私が生きていたとき、油ときれいな布を家にしまっておいたので、その油で仏様に捧げる灯火をともし、布を売って経典の掛け軸を作る費用にしてほしい。そうすれば苦悩を脱することができるかも知れない」といった。この世に戻った善律が女の家に行ってみると、女が死んでから 15 年経っていたが、油と布はそのまま残っていたので、女の望み通りにして冥福を祈った。すると女の魂が来て、「師のご恩のおかげで苦悩から脱することができた」と告げた<sup>2</sup>。

この話は、冥界で苦しむ死者が冥界を訪れた者に、人間界に戻ったら自分が受けている苦しみを脱するために仏教に係わる善行（仏前に灯火をともしたり、経典の掛け軸をつくる費用を用意したりする）を行ってほしいと依頼する内容である。このような内容の話は日本の説話にも多くみられる。

例えば薬師寺の僧・景戒が 787 年から 822 年頃にかけて編纂したとされる『日本霊異記』の上巻第 30 に次のような話がある。

膳臣（かしわでのおみ）広国という者が突然死に、冥界の使者に連れられて冥界に行った。冥界に連れてこられたわけは、昔、広国によって家から追い出され、死後、冥界で鉄の釘を身体に打ち込まれて苦しむ妻が、広国を怨んで閻魔王に訴えたためであった。しかし閻魔王は、広国に罪はなく家に帰ってよいといった。広国はこの世に戻る途中、鉄の釘を身体に打ち込まれ、鉄の鞭で打たれて苦しむ父に会った。父は生前、妻子を養うために殺生や強奪、不正な徴収をしたり、他人の妻を犯したり、父母や目上の人を敬わなかったりなどの罪を犯したため、苦しみを受けていた。父はこの苦しみを免れるため広国に、仏像を造り、経典を書写して罪の苦しみをつぐなってくれるように頼んだ。この世に戻った広国は父の望み通りにして、父の罪をつぐなった。広国は冥界で見た

善因善果、悪因悪果による報いを記録して世間に広めた<sup>3</sup>。

この話の前半は、広国に家を追い出されたことを怨む妻が、怨みを晴らすために広国を閻魔王に訴えたという内容である。しかし閻魔王は、広国には罪はないと裁定している。

後半は、生前に犯した悪行の報いによって冥界で苦しみを受けている広国の父が、苦しみから逃れるために息子の広国に仏教に係わる善行（仏像を造ったり、経典を書写したりする）をして自分の罪をつぐなってもらいたいと頼む話である。

先に紹介した『三国遺事』巻 5 の話と、この『日本霊異記』上巻第 30 の話とでは話の細部には相違もある。たとえば前者では父母の悪行に連座してその娘が冥界で苦しみを受けており、苦しみを脱するための善行を依頼する相手が僧侶である一方、後者では広国の父は自らの悪行のために冥界で苦しんでおり、善行を頼む相手は自分の息子である。このような点は相違するが、しかし 2 つの話とも、冥界で苦しむ死者が冥界を訪れた者に、苦しみを逃れるために現世に戻ったら仏教に係わる善行をしてほしいと依頼するもので、内容は類似している。

先学はこの『日本霊異記』上巻第 30 の話について、冥界で処罰に苦しむ死者たちを追善廻向（供養）の論理に基づいて生者が救ってあげることができるという考え方が述べられていると指摘し、また、このような話を通じて因果応報の論理が人々に説かれることによって、死者各自が抱く怨みは問題とされなくなり、死者は生前の行為の報いによって冥界（地獄）で苦しんでおり、苦しみから救われるためには生者に頼らなければならない存在であるという考え方が人々に広まっていった、と指摘する<sup>4</sup>。

このような先学の指摘を踏まえるならば、『日本霊異記』上巻第 30 の話と類似した内容である『三国遺事』巻 5 の話も、死者は生前の罪の報いによって冥界（地獄）で苦しんでいる存在であり、その苦しみを免れるためには生者に頼って追善廻向（供養）を行ってもらわなければならないとする考えが示されている話としてとらえることができる。

## （2）生者に憑依して救済を依頼する死者

高麗時代の説話をもう一つ紹介する。忠恵王（在位 1330～32 および 1339～44）のときの僧・了円が編纂した『法華靈驗伝』第 16 段の第 6 話は次のような話である。

羅州の役人となった崔璘は赴任するに際し、「真心を込めて大規模な法会を催して仏教供養をするならば、その功德ははかり知れない」として、宋人の楊赫推に、先に任地に行っ

<sup>2</sup> 金思燁訳『完訳 三国遺事』六興出版、1980 年、400-402 頁参照。

<sup>3</sup> 中田祝夫校注・訳、日本古典文学全集『日本霊異記』小学館、1975 年、121-126 頁参照。

<sup>4</sup> 池上、前掲書、66-69 頁。

### 韓国の説話にみる死者と生者の主導権

で法会の準備をしておくように命じた。羅州にやって来た楊赫推は、僧の円妙を招いて雲谷寺で夏安居を行う準備をした。赴任した崔璘が役所に入ると、ある若い女の召使いが突然狂った。いろいろと施してみたが効果がなかった。すると彼女は、「私は狂ったのではない。私は乳母の夫である誰々だ。死後数年が経ってあの世にいるが、未だ極楽に行くことができない。いま幸いにも真心の込められた法会が開かれるので、一つ二つ仏法の深い意を尋ねてみようと思ったが、守護の神将が咎めて中に入れてくれないため、門の外で数日さ迷っている。私だけでなく、私よりも前に死亡した親戚の誰々、誰々も仏法を聞こうと私についてきているが、激しい飢渴にその志も折れて、まずは食べ物を請い、また私に、先に雲谷寺に行って法会の席に入ることができたら、自分たちの名前も呼んで解脱できるようにしてほしい」といった。崔璘はこれを聞いてとても不思議に思い、客を皆帰してから雲谷寺に行き、それら死者の名前を一人ずつ呼んで席を用意して仏法を聞かせてやった。彼はこのときから常に法華経を誦するようになった。翌年の秋、崔璘は都に戻されて昇進し、数年を経ずに宰相になって臣下として最高の位に就いた後、死亡した<sup>5</sup>。

この話は、未だ極楽に行くことができないでいる死者が生者に憑依し、その生者の口を通じて、仏教の法会に参加できるようにしてほしいと頼んだという内容である。先に紹介した冥界（地獄）で苦しむ死者がその苦しみを免れるため、冥界（地獄）を訪れた者に現世に戻ったら自分のために仏教に係わる善い行いをしてもらいたいと依頼する内容の話は韓国と日本双方の説話にみられたが、ここで紹介した死者が生者に憑依して、自分も仏法に接することができるようにしてほしいと頼む話もまた、日本の説話にもみられる。例えば『今昔物語集』巻12第36には次のような話がある。

悪霊に憑かれ病んでいた女が、道命阿闍梨が法華経を誦する堂に籠っていた。阿闍梨が誦経するのを聞いているうちに、その悪霊があらわれて、「私はお前の夫である。お前を苦しめようというのではないが、自分の苦しみが耐えがたいので、自然と憑いて悩ますことになったのだ。自分は生前にあらゆる悪事を好み、殺生し、寺の物を盗み、塵ほどの善行も行いうことがなかった。そのため死んで地獄に墮ち、間断なく苦しみを受けている。だが今、道命阿闍梨が法華経を誦するのを聞いて、地獄を脱して蛇身に生まれかわった。もう一度あの経を聞けば、必ず蛇身を脱して善処に生まれることができる

だろう。阿闍梨のところに連れて行って経を開かせてくれ」といった。女が道命阿闍梨を訪ねて誦経してもらおうと、再び夫の霊があらわれて、「今は蛇身を脱して天上に生まれることができた」といった。その後は、この女性も霊に憑かれて悩まされることはなくなった<sup>6</sup>。

女性に憑依した死者（女性の夫）は、その女性の口を通じて現在の状況や希望を語ったという話である。先学は女性に憑依した死者について、悪霊と表記されながらも自分が生前に犯した罪によって苦しんでいることを自覚し、生者に仏教的な追善を依頼する憐れむべき存在であり、ひたすら生者の追善行為にすがって善処に生まれ変わろうとする弱者として描かれている、と指摘する<sup>7</sup>。

場面の状況など細部については異なる点もあるが、先の『法華靈験伝』第16段の第6話も、内容的にはこの『今昔物語集』巻12第36の話と同様に、死者が生者に憑依して仏教に接する機会を与えてくれるよう依頼したというものである。したがって先学の指摘を参照するならば、『法華靈験伝』第16段の第6話でも、苦しみを脱するためには生者に頼らなければならない存在として死者が描かれているとみることができる。なお、この『法華靈験伝』の話では、若い女性の召使いに憑依した死者がその後どうなったかについて具体的には語られてはいない。しかし、法会に参加できたことによって善処に転生したと考えられる。『法華靈験伝』にはこの話以外にも、死者が生者に法華経の誦経や書写を依頼し、そのおかげで善処に転生したという話がいくつもみられるからである（たとえば第16段の11話や12話など<sup>8</sup>）。

以上『三国遺事』巻5および『法華靈験伝』第16段の話を紹介し、これらの話には日本の説話と同様に、冥界での苦しみを免れるためには生者に頼らなければならない死者の姿が描かれていることをみた。『法華靈験伝』について、当時の庶民に法華経を布教するために著述されたとする見方がある<sup>9</sup>、高麗時代（もしくは新羅時代も含めて）には仏教を通じて日本と同じく、死者はその苦しみを免れるためには生者に頼らなければならない、生者は死者よりも優位に立ち、主導権をもつという考え方が朝鮮半島の人々にももたらされていたとみられる。

### 3. 朝鮮時代の説話にみる死者と生者との関係

<sup>6</sup> 馬淵和夫、国東文麿、今野達校注・訳、日本古典文学全集『今昔物語集1』小学館、1971年、332-334頁参照。この話は『法華験記』にもみられる。

<sup>7</sup> 池上、前掲書、78-90頁。

<sup>8</sup> 金行山訳、前掲書、284-287頁。

<sup>9</sup> 李箕永「法華靈験伝」『東亜原色世界大百科事典』14巻、東亜出版社（ソウル）、1982年、83頁。

<sup>5</sup> 金行山訳『法華靈験伝』霊山法華寺出版部（ソウル）、1982年、274-276頁参照。

仏教が盛んであった高麗時代（さらには新羅時代も含めて）に編纂された説話集には、生前の行為の報いによって冥界で苦しむ死者が苦しみを免れるために、冥界を訪れた者に追善廻向（供養）を依頼する話や、生者に憑依して仏教に接することができるように依頼する話など、日本の説話集と同様の話がみられた。このことから高麗時代（さらには新羅時代も含めて）には仏教を通じて、死者よりも生者が優位に立ち、主導権があるという考え方もたらされていたとみられる。

一方、高麗時代に続く朝鮮時代には仏教は排斥され、儒教が国学、国教とされた。次には朝鮮時代の説話にみられる死者と生者の関係について検討する。

#### （1）怨みを晴らすために積極的に生者に働きかける死者

はじめに、柳夢寅（1559～1623）が編纂した『於于野談』上巻にある次の話を紹介する。

陳という姓の人が外出し、川辺で馬に草を食べさせて休んでいると、周囲には誰もいなかったが突然、人がクシャミをするのが聞こえた。陳は疲れて眠ってしまったが、夢に人があらわれて「私には怨みがあり、あなたに聞いてもらいたい」と告げた。その人は「私の名前は何々で、どこそこに住んでいる。召使いが私を怨み、私の馬をひいて一緒に外出したとき、私を殺してここに捨てた。私の息子は私が死んだというので喪に服して私を祀っているが、その召使いにも私への拝礼をさせるので、私は恐ろしくて供え物を食べることもできない。喪の期間が終わる日に私の息子に会って私の怨みを晴らし、私の骨を集めてほしい。私の骨はこの川辺の木の下に捨てられていて、草が風になびいて鼻に入るのでクシャミが出るのだ」と告げ、その召使いの人相を詳細に教えた。陳は眼を覚まして不思議に思い、木の下を草を押し分けると骸骨があり、草が風になびいて骸骨の鼻に出たり入ったりしていた。

喪の期間が終わる日に、教えられた家を訪ねると、その家の者は非常に驚いて陳を迎え入れた。陳が「あなたの父はどのように亡くなったのか」と尋ねると、その家の者は「父は外出先で死亡し、家に戻ることができず、死亡した場所も分からないので、仮の墓をつくってお祀りしたが、昨日夢に父があらわれて、明日最初に来る客を丁重にもてなせば、私の死んだ場所を教えてくれるであろう」といった。あなたが教えてくるのか」といった。陳は突然意識が朦朧として夢のような心地になると、屏風の間から人の声がして、「庭を通りすぎる者がその召使いである」というので、よく見ると人相が川辺で聞いたのと同じであった。陳がこれを伝えると、喪に服している人はその召使いを縛りあげ鞭で打つと、一つ残ら

ず白状した。そこでその召使いを殺し、川辺に行き父の骨を集めて墓に埋葬した<sup>10</sup>。

この話は、殺されて埋葬されずにあつた骸骨（死者）が生者の助けを得て、殺された真相を息子に伝えて怨みを晴らしたという内容である。これと似た内容の話が『日本霊異記』上巻第12にあつて興味深い。

僧の道登が、奈良山で人や獣に踏みつけられている髑髏を哀れんで、従者の万侶にその髑髏を木の上に置かせた。同年の大晦日に、ある人が万侶を訪ねてきて「おかげで安らくなったが、今晚でなくては其の恩に報いることができない」といって、自分の家に案内し、用意されてあつたご馳走を万侶にも勧めて2人で食べた。明け方、その人は万侶に「私を殺した兄が来そうなので、早く去るように」といった。万侶がわけを尋ねると「昔、私は兄と一緒に商売をしていたが、私に銀40斤の儲けがあつたとき、兄はこれを羨み、私を殺して銀を奪った。それ以来、人と獣が私の頭を踏み歩いていて、あなたのおかげで苦しみを離れることができた。今夜その恩に報いようとしたのである」と告げた。家に入ってきた母親と兄が万侶をみて驚き、わけを尋ねた。万侶がこれまでのことを話すと母は兄をののしり、万侶に礼を尽くしてさらに食べ物勧めた。このように死者や白骨でさえ恩を忘れない。ましてや生きている人が恩を忘れてよいであらうか<sup>11</sup>。

どちらの話も、殺されて葬られることのなかつた髑髏や骸骨が生者の助けを得て遺族に死の真相を伝えたという大筋である。しかし詳細にみると、2つの説話で語られている死者の様相には違いがみられる。

後者の『日本霊異記』上巻第12の話について先学は、兄に殺されて怨念を抱いて死んだはずの髑髏が危険な霊とされていないことに注目している。そして、この説話の主題は報恩の徳であり、この徳を介して死者に対する生者の優位性が確保され、死者は生者による世話や介護を待ち望む弱々しい存在とされるようになる、と指摘している<sup>12</sup>。

先学が述べるように、この話は髑髏を木の上に置いて人や獣に踏まれる苦しみから救った生者がその髑髏（死者）から恩返しを受けたという内容であり、話の主題は報恩である。この話での死者は、人や獣に踏まれる苦しみを積極的に生者に訴えるのではなく、偶然助けてくれた生者にその恩を報いる存在として描かれている。また死者は自分を殺した兄に復讐心を抱くの

<sup>10</sup> 金東旭校注 韓国古典文学大系4『於于野談・雲英伝・要路院夜話・三説記』教文社（ソウル）、1984年、43頁参照。

<sup>11</sup> 中田祝夫校注・訳、前掲書、89-91頁参照。

<sup>12</sup> 池上、前掲書、63-64頁。

韓国の説話にみる死者と生者の主導権

でもなく、兄が帰ってくることを恩人に告げ、立ち去るように伝えている。死者は怨みを訴えたり復讐を果たしたりするために自ら積極的に行動する存在としては描かれていない。

一方、前者の『於于野談』の話では、死者は怨みを晴らすために積極的に生者に働きかけている。偶然通りかかった生者に、自分が殺された真相を息子に伝えることを頼み、自分を殺した者の人相も伝えている。真相を知った息子が父を殺害した召使いを殺していることから、死者は自らの願望を達成するためには生者の援助を得なければならない存在として描かれているという見方もできる。しかし死者は積極的に生者に働きかけて怨みを晴らすようとしている。そして遂には自分を殺した犯人を生者に告げて殺させ、怨みを晴らしている。

『日本霊異記』の話と『於于野談』の話は双方とも、髑髏や骸骨として苦しみを受けていた死者が偶然通りかかった生者に助けられる話であるが、『於于野談』の話は、『日本霊異記』の話のような死者による生者への報恩談ではない。『於于野談』での死者は、怨みを晴らすために積極的に生者に働きかけて自分を殺した生者に復讐を果たしており、生者に世話や介護、救済を待ち望む弱々しい存在とはいえない。生者に働きかける積極性、生者に対する優位性、主導権をもつ存在といえる。

(2) 第三者にも怨讐を向ける死者

朝鮮時代の説話集『於于野談』での死者は『日本霊異記』での死者と違って、怨みを晴らすために積極的に生者に働きかける存在であることをみた。死者の積極性、生者に対する死者の優位性、主導権を示す説話を『於于野談』上巻からもう一つとりあげてみる。

安徳寿は世宗(在位 1418~50)の時代の名医である。ある人が病気になって数ヶ月苦しんでいた。安徳寿が薬を使って治療し、病状が5回変わっても、そのたびに薬が効果を示した。ある夜、安徳寿の夢に人があられ、「私はこの病人との間に累代に及ぶ怨讐があり、上帝に告げると「必ず殺してしまえ」ということで、5回病状を変えて薬の効果を避けたが、公が5回薬を変えて病状を治した。私は次には公に勝つであろう。明日病状を6回目変えるが、公がもし新しい薬を使って治したら、私は怨讐を公に向けて禍を与えるであろう」といった。安徳寿が夢から覚めて怪しく思っていると、病人の家から人が来た。病状を問うと、病状が6回目変わったということであった。安徳寿は「病になったか」といって、その家に行かなかった。ついにその人は死んだ。悲しいことである。邪気が人に祟ることはあるが、人が良薬でそれを防げば、邪気はその隙に乗ることはできない。中国秦の医であった緩が病魔の祟りを恐れたであろうか。安徳寿は夢に惑わ

されて人を救えなかった<sup>13</sup>。

名医安徳寿の夢にあらわれて病人との間の累代に及ぶ怨讐を告げた者は、天帝にも告げてその怨讐が認められているということから、すでにこの世を去った者すなわち死者とみられる。この話では、怨讐による病を医師が治療すると、それは怨讐を妨害することとなり、医師が治療によってさらに妨害するならば、死者はその医師に怨讐の鋒先を向けると告げる。医師が治療を止めると病人は死に、死者の怨讐は果たされる、という内容である。

このような累代すなわち幾世代にも及ぶ怨讐の話として、『今昔物語集』巻14にある次の話が想起される。

信濃守を務めた人が任期後に上京する途中、一匹の大きな蛇が一行についてきた。従者たちは殺してしまおうといったが、信濃守は「きつとわけがあるのであろう。夢の中で示してください」と祈って寝ると、夢に一人の男があられ、「長年の仇敵が衣装箱の底に隠れている。それを殺そうと後をつけてきている」と告げた。翌朝、信濃守が見ると、衣装箱の底で老いた鼠が小さくなっていた。守は「この蛇と鼠は前世からの仇敵だった」と知って深い慈しみの心がわき、蛇と鼠の両者を救ってやろうと思い、一日のうちに法華経を書写し供養してやった。その晩の夢に、きれいな服装を身につけ立派な容姿をして微笑む2人の男があられ、「自分たちは前世に仇敵となり、互いに殺しあってきたが、あなたが慈悲の心で法華経を書写し供養してくれたおかげで、畜生を免れて今、切利天に生まれようとしている」と告げ、二人とも天に上がっていった<sup>14</sup>。

この話について先学は、生前の怨みを死後に持ち越し、復讐に復讐を重ねてきた2人の中の葛藤が輪廻転生によって解消されたことが語られており、また、仏教式の供養であれば二者間の葛藤の解決を当事者以外の第三者にゆだねることもでき、ゆだねられた当人にとっては供養などの利他行が自分自身の積徳行為にもなることが示されている、と述べている<sup>15</sup>。この話では、怨みあう当事者たち以外の第三者が、畜生道に堕ちて苦しんでいる当事者たちを追善廻向(供養)や輪廻転生(後生善処)の論理によって救ってやることができると語られている。すなわち死者よりも生者に優位性や主導権があることが示されている。

このように『今昔物語集』の話では、幾世代にもわたって怨讐

<sup>13</sup> 金東旭校注、前掲書、41-43頁参照。

<sup>14</sup> 馬淵他校注・訳、前掲書、478-481頁参照。この話は『法華験記』にもある。

<sup>15</sup> 池上、前掲書、74-75頁。

を繰り返してきた2人の死者は第三者の介入（供養）によって善処に転生して救われる。追善廻向（供養）をもって介入する第三者は怨讐を繰り返す死者たちを救ってやることができ、死者たちもその救済に感謝する。

一方、『於于野談』で語られる累代に及ぶ怨讐をもつ死者は、医術でもって介入することになる第三者に対して、怨讐を晴らす妨げになるとして禍を及ぼそうとする。死者と生者との関係からみるならば、介入する（ことになる）生者に禍を及ぼそうとする死者の方に優位性、主導権があるといえる。

以上、殺されて川辺や道端に捨てられていた髑髏や骸骨の話と、幾世代にもわたり怨みあってきた死者たちに生者が介入する（ことになる）話について、朝鮮時代の説話と日本の説話とを比べてみた。

同じく生者に助けられる髑髏や骸骨の話ではあるが、死者による生者への報恩談として語られる日本の説話とは異なり、朝鮮時代の説話では、怨みを晴らすために積極的に生者に働きかけ、遂には怨讐を晴らす死者の姿が描かれていた。また、幾世代にもわたる怨讐をもつ死者同士に生者が介入する（ことになる）話においては、第三者の介入（供養）が怨みあう死者たちを善処に生まれ変わらせることになる日本の説話とは異なり、朝鮮時代の説話では、死者たちの怨讐に介入することになる生者にも怨みの鋒先を向ける死者の姿が語られていた。

高麗時代の説話には死者に関して、前世での悪行によって死後冥界で苦しんでいる死者が、苦しみから脱するために冥界を訪れた者に供養を依頼する話や、生者に憑依して仏教に接することができるよう依頼する話など、日本の説話とほぼ同じ内容の話がみられた。一方、朝鮮時代の説話では日本や高麗時代の説話とは異なり、積極的に行動して怨みを晴らし、また第三者にも禍を及ぼす死者の姿が描かれていた。生者と死者の関係について、先学の指摘に基づくならば日本の説話からは死者に対する生者の優位性、主導権が指摘でき<sup>16</sup>、このことは高麗時代の説話においてもいえる。一方、朝鮮時代の説話からは生者に対する死者の優位性、主導権が指摘できる。

このような相違には仏教の因果応報（善因善果、悪因悪果）、追善廻向（供養）、輪廻転生（後生善処）の論理の有無が考えられる。先学は、日本に伝来した仏教はこれらの論理を通じて、生者に対する死者の怨みが問題とされることはなくなり、死者は生前に犯した自己の悪行のため死後に冥界（地獄）で苦しみを受け、その苦しみを脱するためには生者に救済を依頼しなければならない憐れむべき存在であり、恐ろしい存在ではないという思考を日本人にもたらした、という<sup>17</sup>。

朝鮮半島においても、仏教が繁栄した高麗王朝期に僧侶が編纂した説話集の説話には、日本の説話と同じく死者よりも生者が優位に立ち、主導権があるという考え方をみることができる。これらの説話は仏教の論理に基づくものと考えられる。

一方、朝鮮王朝期には仏教は排斥され、儒教が国教、国の教えとされた。人々とりわけ知識人、上層階級の人々には儒教の教養を身につけ儒教の教えを实践することが求められた。ここでとりあげた説話集『於于野談』も儒教の教養を身につけた知識人が編纂したものであり、そこに描かれている死者の様相、すなわち怨みを晴らすために積極的に行動し、生者よりも優位に立ち、主導権をもつ死者の姿は仏教の論理に基づくものとは異なる姿であると考えられる。

### （3）霊的存在（死者）に対して主導権をもつ生者

朝鮮王朝期の説話では、死者は怨みを晴らすために積極的に行動し、生者よりも優位に立ち、主導権をもつ存在として描かれていた。このような死者に対して、如何なる生者が死者よりも優位に立ち、主導権をもつことができるとされたであろうか。先に紹介した『於于野談』上巻の名医安徳寿の話の末尾には、死者のいうことを恐れて病人に薬を与えることを止めた安徳寿への批判が記されてあった。死者の言動を恐れないことが生者に求められたのである。しかし、死者のいうことを恐れずに病人に薬を与えた場合、死者は怨讐の鋒先を安徳寿に向け、そのため安徳寿は命を落とすことになる恐れもある。

仏教の論理に基づけば、死者を恐れる必要はなく、生者が死者よりも優位に立ち、主導権をもつのであるが、仏教が排斥された朝鮮王朝期の説話では、どのような生者が死者のいうことを恐れず、死者による禍を除き、死者よりも優位に立ち、主導権をもつことができるとされたのであろうか。成俔(1439～1504)が編纂した『慵齋叢話』巻3には次のような話がある。

安公（『慵齋叢話』の編者である成俔の義父）は厳格な人で、多くの地域の長官を歴任し、官吏たちは恐れ、民衆はつき従った。安公が瑞原というところの別荘にいたとき、道の横に巨大な古木があった。空が曇ると、その古木に住む鬼神が口笛を吹き、夜には鬼火を灯して騒いでうるさかった。村の少年が勇気を奮ってその古木を切り倒そうとすると、鬼神がその少年に憑き、少年は夜も昼も狂い歩き、人々は誰も少年をとめることができなかった。しかし安公の名前さえ聞けば、少年は素早く物陰に隠れるので、安公が少年の家に行き、人に命じて少年の髪をつかんで引き出させると、少年は顔を青くして哀願した。安公が「お前は村に居ついて200年になるが、けしからぬ行動ばかりし、今はこの家をさいなんている。何をしようというのか」と叱りつけると、少年は額を床につけて丁重に謝った。安公が東に向かったのびた桃の枝を

<sup>16</sup> 池上、前掲書。

<sup>17</sup> 池上、前掲書。

### 韓国の説話にみる死者と生者の主導権

切り、その枝で少年の首をはねる真似をすると、少年は転げて泣き叫び、地面に伏して死んだように長い間眠っていた。3日目に目覚めると、奇異な症状はなくなり、もとに戻った<sup>18</sup>。

これは死者に関する話ではないが、死者と同じく霊的存在である古木の霊の話である。古木の霊は人に憑いて狂わせるほどの恐ろしい存在であるが、「厳格な人」である安公の名前さえ聞けば隠れ、安公の前に引き出されれば哀願する。恐ろしい古木の霊も安公だけには逆らうことができないが、それは安公が「厳格な人」であったためである。

儒教が重視された朝鮮王朝期では、儒教の教養をどれだけ身につけているか、儒教の教えに基づいた生活や行動がどれだけ実践できているかが、人々や一族を評価する基準とされた。「厳格な人」という表現は、儒教の教養を十分に身につけ、儒教の教えに基づいて行動できる人物をあらわしていると考えられる。儒教の教養を身につけた人物が、恐ろしい神霊に屈することなく神霊を追い払うことができたのである。

同じく木に宿る霊の話として、鎌倉時代の僧・無住が1279年から1283年にかけて編纂したとされる『沙石集』の巻6第13話にある話を紹介する。

尾張国の中嶋というところに遁世した上人が寺を建て、僧5、6人が住んでいた。そこに生える大きな古木を寺の造営のために切ろうとすると、ある在家の人に神が憑いて、「我らはこの木を家として住んでいるが、無情にも僧たちが切ろうとしている。あまりにもひどいことなので、止めさせてほしい」と語った。人々が「木を切ろうとする僧に憑いて祟りもすればよいのに、関係のない者をこのように責めてよいのか」と問うと、「我らは僧の袈裟の風にあたり、陀羅尼の声を聞いてこそ、苦しみ患いも和らぐので、僧をどうして悩ますことができようか。ただこのように伝えてほしい」というので、僧たちは古木を切らずにおいたということである<sup>19</sup>。

これも古木に宿る神霊の話であるが、この話に登場する神霊は、自分たちが宿る木を切ろうとする僧たちに不満があっても、直接僧に訴えることができず、在家の者に憑いて自分の意向を僧に伝えてくれるように頼む。在家の人に憑くが、それは憑いた人を狂気にするような恐ろしいものではなく、僧への伝言を頼むための憑依である。また古木に宿る神霊は、僧たちが着る袈裟から発せられる風（ありがたい影響力と考えられる）や、僧たちが唱える読経のおかげで苦しみから救われている存在で

もある。仏教の事物や読経は神霊をも恐ろしくない存在とするほどの影響力をもつ、と考えられていたのである<sup>20</sup>。

一方、先の『慵齋叢話』の話に登場する古木の霊は、自分が宿る木を切ろうとした少年に憑き、少年を狂わせる恐ろしい存在である。しかし「厳格な人」である安公だけには逆らうことができない。儒教が国学、国教とされ、儒教の教養を具えた人物が評価された朝鮮王朝時代では、説話の世界においても儒教の教養を身につけた「厳格な人」が霊的存在に対して優位に立ち、主導権をもつとされたのである。

仏教の影響を受けた日本の説話では、経典の読経や仏教の事物には神霊をも恐れさせる威力があり、神霊であっても僧侶の読経や袈裟などの力によって苦しみから救われるとされたのである。これに対して儒教の影響を受けた朝鮮王朝期の説話では、儒教の教養を身につけた人物が神霊以上の力をもつとされた。日本の説話では人物ではなく読経や袈裟などの仏教の事物そのものの威力が神霊よりも上位にあるとされ、仏教を修めた人物に重点が置かれているのではない。一方、儒教の影響が強い朝鮮王朝期の説話では、儒教の教養を身につけた人物が神霊よりも優位に立ち、主導権をもつと考えられ、人物に重点が置かれているといえる。

#### (4) 生者と死者との対決

儒教の教養を身につけて霊的存在に対して主導権をもつ人物の例として、古木の霊を追い払う安公という人物の話を紹介したが、『慵齋叢話』5巻には安公に関する次のような話もある。

安公が林川（扶余）郡守になったとき、普光寺に大禪師某という僧がいて、しばしば来て会っていた。その人となりと一緒に話をするのに値するので、互いに親しくなった。その僧は田舎の女性を連れてきて妻にし、人に知られず往来していたが、ある日その僧が死んで蛇に化し、妻の部屋に入ってきて、昼間には甕の中に入っていて、夜になると妻の懐に入って彼女の腰を巻き、頭は胸にもたれた。尾の間に陰茎のような瘤があり、その懇ろに誠を尽くし情の深いのはまるで以前と同じであった。安公がこの話を聞いて、その女性に蛇が入った甕をもって来させて僧の名を呼ぶと、蛇が頭を出した。安公は「妻を恋しく思っただけで蛇になったが、僧としての道が果たしてこのようでよいのか」と叱りつけた。蛇は頭を引っ込めて入っていった。安公は人に知られずに小さな箱を作らせ、その妻に蛇を誘って「郡守様があなたに新しい箱をくださり、身を安らかにさせてくださるので、早く出てきてください」といわせて、裳（チマ）を箱の中に広げてさせると、蛇が甕から出てきて箱の中に移って臥した。そこで役所の役人2人

<sup>18</sup> 民族文化推進会「慵齋叢話」古典国訳叢書『大東野乗』第1巻、ミン文庫（ソウル）、1967年、81-82頁。

<sup>19</sup> 小島孝之校注・訳、新編日本古典文学全集『沙石集』小学館、2001年、349頁参照。

<sup>20</sup> 池上、前掲書、88-89頁。

ほどが箱に蓋をして釘で打ちつけたので、蛇は飛びはねたり転げ回ったりして出てこようとしたが、出てこられなかった。弔旗に僧の名前を書いて先頭に立てて引導し、僧たち数十人が太鼓と木製の食器（バラ）を鳴らして経典を唱えて続き、その箱を川に浮かべて流したが、その後妻には何の祟りもなかった<sup>21</sup>。

情愛の念のために蛇に転生した僧の話である。安公は僧が転生した蛇を除去し、その後は如何なる祟りもなかったという。ところで『慵齋叢話』4巻には同じく情愛の念で蛇に転生した女僧の話があるが、こちらの結末は上の話とは異なっていて興味深い。

洪公が道を行く途中で雨に降られ、小さな洞窟の中に駆け込んでみると、その洞窟の中には家があり、17、8歳の態度が美しい女僧が一人で坐っていた。洪公が「どうして一人で坐っているのか」と尋ねると、女僧は「女僧3人で暮らしているが、2人は食べ物をもらいに村へおりにいっている」といった。洪公はついにその女僧と情を通じ、「某月某日あなたを迎えに来て家に連れて行こう」と約束した。女僧はその言葉を信じて、いつもその時が来るのを待っていたが、その日が過ぎても洪公があらわれないので、心に病をえて死んだ。洪公が後に南方節度使という役人になって鎮営という土地にいるとき、ある日トカゲのような小さなものが洪公の布団を通りすぎたので、洪公は役所の役人に命じて外に投げ出させると、役人はそれを殺してしまった。しかし次の日も今度は小さな蛇が入ってきて、役人はまたこれを殺した。次の日もまた蛇が部屋に入ってきたので、はじめて前に約束した女僧の祟りではないかと疑った。しかしその武威を頼りにして、すべて取り除き、役人に命令して殺してしまった。しかしその後は、毎日あらわれない日がないだけでなく、あらわれるたびに次第に大きくなり、ついに大きな蛇になった。洪公はすべての兵士を集めて、皆に剣を持たせて四方を囲ませたが、大蛇は依然として包囲を破って入ってきた。兵士も蛇が入ってくるとすぐに切ってしまったり、燃える薪の火を四方につけておき、捕まえて火の中に入れてしたが、蛇がいなくなることはなかった。そのため洪公は、夜になると蛇を箱の中に入れて部屋の中に置き、昼には箱の中に入れて、領内を巡幸するときも人に箱を背負わせて先に立たせて行かせたが、洪公の精神が次第に衰弱して、顔色もやつれて青白くなり、ついに病気になるて死亡した<sup>22</sup>。

同じく情愛の念のため死後に蛇に転生した者の話であるが、前の話では蛇は生者（安公）に排除されたのに対して、この話では蛇が生者（洪公）を殺してしまう。なぜ一方の生者は蛇を排除でき、もう一方の生者は排除できずに蛇に殺されてしまったのか。

先に述べたように安公は「厳格な人」すなわち儒教の教養を身につけた人であった。木に宿る霊を屈服させることのできる安公は同様に、情愛の念によって僧が転生した蛇も排除できる人物であったと考えられる。

一方、洪公は「武威を頼りにして」蛇を排除しようとしたが、反対に蛇にまとりつかれて死んでしまう。生者は「武威を頼りにして」では情念を持ち続ける死者（蛇）よりも優位に立つて主導権をもつことはできないのである。また洪公は死者（蛇）を屈服させるほどの「厳格な人」すなわち儒教の教養を身につけた人ではなかったとも考えられる。

仏教の影響を受けた日本の説話の世界では、仏教をどの程度修めた人物であるかが問題となるのではなく、追善廻向（供養）や輪廻転生（後生善処）の論理によって、または先の『沙石集』での話のように読経や仏教の事物の威力によって、生者は神霊や死者などの霊的存在よりも優位に立ち、主導権をもつ。

他方、仏教が排斥され、儒教が重んじられた朝鮮王朝期の説話のなかでは、儒教の教養を身につけた人物が主導権をもって霊的存在を排除することができる。しかし、霊的存在よりも優位に立ち、主導権をもつことができるほど儒教の教養を身につけた人物であるかどうかは、実際に霊的存在と対決してみないとわからない。霊的存在を屈服させることができれば、その人物は儒教の教養を具えていて霊的存在よりも優位に立つことになるが、屈服させることができないならば、儒教を修めるのに未だ不十分であったということになる。儒教の教養を身につけていない生者は神霊や死者などの霊的存在よりも優位に立つことはできず、霊的存在によって狂わされたり殺されたりすることもある。霊的存在と生者のどちらに主導権があるかは、その場での両者の力関係しだいということになる。

#### （5）祀る必要のない死者

このように朝鮮王朝期の説話では、儒教の教養を身につけた人物が死者よりも優位に立ち、主導権をもつことができるとされた。朝鮮王朝期には儒教の教養を身につけるとともに、儒教を実践することも重視された。その人物が儒教の教養を身につけているか否かは、儒教を日常で実践しているか否かでも判断されたのである。儒教の実践のなかで最も重視されたのが祭祀、すなわち死者（祖先）を祀ることである。次には祭祀と関連した生者と死者との関係について考察する。

『慵齋叢話』4巻に次のような話がある。

<sup>21</sup> 民族文化推進会、前掲書、122頁。

<sup>22</sup> 民族文化推進会、前掲書、91-92頁。



韓国の説話にみる死者と生者の主導権

私（编者である成俔）の隣家に奇宰相がいたが、当代の明賢であった。私は奇の孫・裕と幼いときから交わってきた。宰相が死んで、私は裕と一緒に官職に就いたが、裕が用事で家にいたとき、家が不吉になり、人々は家に入ることができず、裕もまた他の場所に去っていった。私とその隣家から話を聞くと、その家のある子供の召使いが門の外に立っていると、ふと背中に何か物がついて重くて我慢ができなくなり、面食らって、家に戻って調べてみたが何も見当たらなかった。かなり長いことあってから重みは解けたが、全身に汗が流れていたという。この後、怪しいことが多く起こり、人が飯を炊こうとすると、釜の蓋はそのままあるが、糞が釜の中いっぱいになり、飯は庭に散らばっていた。また、何者かが、あるいは膳や食器をつかんで空中に放り投げ、あるいは大釜をもって空中でまわし、これを打つと鐘のような大きな音がするのであった。また、あるいは畑の野菜をみな抜いて逆さまに植えて萎びさせてしまい、あるいは鍵をかけておいた箆筒から服をみな取り出して大梁の上にならずらりとかけ並べ、あるいは掛け軸や絵にみな題字をつけて篆字のようにし、あるいは人のいない焚き口で火が突然おこり、消す人がいると火が玄関脇の部屋に移って燃えるのであった。このようなわけで家を捨て、人の住まない年月が既に数年になった。裕が「先祖が住んでいた家を長い間継ぐことができないでいる。どうして人として先祖を崇めないでいられようか。益荒男がどうして鬼神を恐れようか」といって、その家に居住すると怪しいことが再び起こり、食器を動かしたり、人の顔に糞を塗ったりした。裕が叱りつけると、空中で声を張り上げて「お前がどうしようというのか」といい、数日をおかず裕も死んだ。人々は「裕の表弟（イトコ）の柳継亮が乱を陰謀して死刑にされたので、その鬼神が家を頼ってやってきて祟りを起こした」といった<sup>23</sup>。

また、同じく『慵齋叢話』4巻にある次の話も合わせて紹介する。

斯文・李杜という人が戸曹正郎になったが、家に怪物が入ってきて悪事をするのであった。その声を聞くと、死後既に10年にもなる叔姑（父方のオバ）の声であった。家での作業をいちいち指示して、朝夕食事を供えるだけでなく、食べたいものがあればみな要求し、少しでも意にそぐわなければ非常に怒った。匙と箸を持つ様子や飯を食べる様子は見えないが、供えた食べ物も自然となくなった。腰から上は見えないが、腰から下は紙を裳（チマ）にして、2本の足は瘦せていて、まるで漆のようで、肉はなく骨だけであった。人々が「ど

うしてそのようなのか」と尋ねると、「死んでから長く地下にいる者が、どうしてこのようでないことがあるか」と答えた。いろいろな方法で追い払おうと祈ったが、間もなく斯文が病気になるまで死んだ<sup>24</sup>。

この2つの話は、家に留まる親族の死者についての話である。前者では死亡したイトコ（表弟、父方のオバの子）が、後者では父方のオバ（叔姑）が家に留まり、そのため家に禍があり、家の者（当主）が死亡したという話である。

前者では当主の裕がそのイトコの霊を「叱りつけ」たが効果はなく、後者ではオバの霊を追い払おうと祈ったが無駄であった。どちらの話でも死者が主導権をもち、結局は当主が死亡し、死者の優位で終わっている。特に前者では、イトコは「乱を陰謀して死刑にされた」とのことであり、怨みを抱いている死者とみられる。当主の裕は霊を「叱りつけ」ており、いわば生者と死者との対決であるが、当主の裕は死亡してしまい、生者に対する死者の優位で終わっている。

これらの話のように家に禍をもたらす親族の死者がいる場合、仏教的思考からすれば、たとえ怨みを抱く死者であっても、追善廻向（供養）を行って善処に転生させて禍をなくすことができる。ところで仏教が排斥された朝鮮王朝期には、死者に対しては仏教での追善廻向（供養）ではなく儒教祭祀が行われた。紹介した話のように家に留まって禍をもたらす親族の死者がいる場合、儒教祭祀を行えば、仏教での追善廻向（供養）と同じく、それらの死者に対処できるであろうか。

儒教祭祀は親への孝の延長として親の死後に行われるものであり、理念的には儒教祭祀で祀られる死者は、夫婦のうちで夫の父系直系尊属とその配偶者（夫の父母、夫の父の父母、夫の父の父の父母、夫の父の父の父の父母など）であり、それ以外の死者は祀らない。つまり前者の話に出てくるイトコや後者の話に出てくるオバは、そのイトコやオバの息子が祀るべきであり、前者の話での裕はそのイトコを、後者の話での斯文はそのオバをそれぞれ祀る必要はない。

朝鮮王朝期の説話では、自分が祀る必要のない親族の死者は自分（生者）に禍をもたらす恐ろしい存在として語られ、生者よりも優位に立つ存在であった。

#### （6）祀られる死者

このように儒教祭祀の対象となる死者は、祭主となる息子からみて父母、父の父母、父の父の父母、父の父の父の父母など父系直系尊属とその配偶者であり、息子にはそれ以外の死者を祀る責務はない。説話のなかでは、自分が祀る必要のない親族の死者は、自分に禍を及ぼす恐ろしい存在となる。

<sup>23</sup> 民族文化推進会、前掲書、112頁。

<sup>24</sup> 民族文化推進会、前掲書、113頁。

一方、子孫に祀られている死者も、自分や子孫を害する者には積極的に言動して、その者を厳しく罰する存在として描かれている。たとえば『慵齋叢話』8巻に次のような話がある。

権姓の者が文官として朝廷で立身出世した。父が死ぬと、他人の墓を暴いて、そこに父を葬ろうとした。墓の主人が「この墓は私の父の墓である。父は、官職はたとえ低くても義気が厳かで不屈であり、普通の人ではなかったので父の墓を暴いてはならない。必ず害があるであろう」といったが、権は聞かず、ついにその墓を暴いて棺を開いて死体を捨てた。その息子が死体をなでさすりながら痛哭し、「もし英霊がいるなら、この怨めしさ、悔しさを報復しないであろうか」といった。その夜、風水師の李官の夢に赤い髭の男があらわれ、怒って叱りつけ、「お前がどうして私の安宅を奪って他人に与えたのか。禍根はお前にある」といって、握り拳で風水師の胸を打つと、風水師は胸を患い、血を流して間もなく死んだ。続いて権もまた国から誅せられて家門は滅亡した。人々はみな墓を暴いたためだといった<sup>25</sup>。

風水からみて地勢のよい場所は墓所としてもすぐれた場所であり、そのような墓所に遺体を埋葬すれば子孫に幸運がもたらされると考えられている。この話は、権勢のある者が自分の父を埋葬するため、地勢のよい場所に既にあった他人の墓を掘り返して、葬られていた遺体を捨てたが、それを怒った死者が墓を掘り返した者やその一族、さらには風水師にまで禍を及ぼしたという話である。死者は自分を害する者には積極的に行動して、それらの者を滅ぼすのである。

また、『於于野談』上巻には次のような話がある。

兪大修は宰相であった兪絳の孫である。官職は正言に至ったが、早くに両親の喪に服した。墓の下方に仮小屋をつくり、そこで起居して喪に服していたが、召使いの一人が怨んで彼を殺そうとしていた。大修がある夜夢を見たが、祖父の絳が慌てふためいてやって来て、窓を押し開き、「早く起きて、頭と足を今と逆さまにして横になれ」といった。驚いて目覚めると汗が身体を流れ、非常に恐ろしかった。頭を窓の方に向けて横になっていたが、布団をそれまでと上下反対にして敷きなおし、枕も反対にして横になった。眠れないでいると、突然ある者が窓を開けて、何かを2本の足の間に突き刺して行った。驚いて触ってみると、大きな刃物が両足の間に刺さっており、掛け布団と敷き布団を貫いて、床にまで突き刺さっていた。多くの召使いを呼んで追わせると、賊は絳の墓の上に四つん這いになって動けないでいたので、捕らえて殺し

た。人々は皆、「絳の神霊がそいつを捕まえて墓の上から逃げられないようにしたのだ」といった<sup>26</sup>。

自分が祀る必要のない死者は自分（生者）に禍を及ぼす恐ろしい存在となるが、祀る必要のある死者で、既に祀られている死者も、祀ってくれている子孫に危機が及んだとき、子孫を救うために積極的に行動し、子孫を害そうとする者を自ら捕らえる存在である。

その一方で、子孫が祀り方を誤れば、それを怒る存在でもある。『於于野談』下巻には次のような話がある。

黄大任は順懐世子嬪の父である。嬪は母方の家で成長したが、その家は城内にあった。一方、本家（父方の家）は遠方の峠にあり、たいそう辺鄙で遠いところであった。嬪が初めて王宮に入った際、祭祀を行うことを城内の家の祠堂で祖先に告げた。召使いが誤って、家の場所の遠近に従って城内の家での祭祀を先にし、本家を後にした。召使いは城内の家の祠堂に山のように飲食物を供え、一方本家は寂々としていた。突然大きな声が祠堂の中からは、召使いを引きずり出して祠堂の門の外に束縛し、怒鳴りつけ拷問するようであった。霊は「早く大任を呼んでこい」といった。大任が祠堂の門の外に平伏すると、祠堂の中から再び声がして、「お前の家で祭祀があるが、母方の家で先にし、我が本家には行き届かないのは何事か」といった。大任は「家に大きな慶事があって宮中から賜りものがあり、召使いが誤って近いところから先にし、遠いところを後にしたので、私の罪は万死に値します」といった。霊は「大慶、大慶と何の大慶があるのか。二度とそのようなことをいうな」といった<sup>27</sup>。

儒教では祖先祭祀が重視されるが、祖先（死者）は正しい祀り方で祀らなければならず、正しく祀られない場合、祖先（死者）は自ら積極的に行動し、正しく祀るように子孫に働きかける。

また先に、召使いに殺されて骸骨のまま川辺に捨てられ、祀られずにいた死者が、通りかかった生者に自分が殺された真相を息子に伝えてくれるように頼み、怨みを晴らした後、息子によって骨が集められ、墓に葬られたという『於于野談』の話を紹介した。この死者は息子が祀る必要のある死者で、その後、祭祀を受けつづけたであろう。儒教では祖先祭祀が重視されるが、朝鮮王朝期の説話には、祖先（死者）は正しく祀られなければならない、正しく祀られていない祖先（死者）は正しく祀られるように自ら積極的に行動することが語られているといえる。

<sup>25</sup> 民族文化推進会、前掲書、208頁。

<sup>26</sup> 金東旭校注、前掲書、52-52頁。

<sup>27</sup> 金東旭校注、前掲書、263-264頁。

## (7) 情愛の念を持って自殺した若い女性の死者

先に、情愛の念によって蛇に転生し、その対象である男性につきまとい、遂には男性を死亡させた女僧の話を紹介した。『備齋叢話』巻5には、男性（夫）への情念を持ち続けて自殺した若い女性の話がある。それを紹介すると次のようである。

安という姓のソウルの名門一族の人がいた。成均館で学んでいたが、肥えた馬に乗り、軽快な服装でソウルの町を歩きまわっていた。早くに喪に服して独身で暮らしていたが、当時の宰相の家で召使いをしている裕福な美女が東城に住んでいると聞き、多くの財物を礼物として贈ったが、思い通りにならなかった。そのようであったが、安が病気になったとき、仲介する者が恋の病であると伝えて女性の心を動かし、ついに婚姻した。女性は17、8歳くらいであったが、容姿と態度がとても美しく、互いに日ごと情が深くなっていった。その女性の家でもまた良い聲を得たことをよるこび、朝夕に必ず食べ物を揃え、家の財産の大半が安のところに入っていた。

他の何人もの聳たちがこれを妬んで宰相のところに行き、「私どもの義父が新しい聲を得て以来、家は傾き破産し、次第に暮らしが困難になっています」と訴えたので、宰相は怒って、「私の同意を待たずに突然良家の聲を得たということであるが、私はそれを大いに懲戒して後人の戒めとする」といい、すぐに召使い数人を行かせて、安の義父と妻を捕らえてこさせた。このとき安は妻と食膳に向かっていたが、恐れ怯えてどうしていいかわからず、互いに抱きあって痛哭し、手を握りあっているだけであった。妻は捕らえられて宮殿の奥深くに閉じ込められ、2人は多くの門と高い壁によって内と外に離れねばならなくなってしまい、安はどうすることもできなかった。ただ妻の実家の者と共に多くの金品を賄賂として宮中の召使いや門番の兵卒たちにわたし、小屋を宮殿の横に設けて、夜に乗じて2人が会う場所とした。

ある日女性の家から赤い履物一足を送ってきて、女性が常に手にして遊ぶので、安が「このような履物を履いて将来他の人と楽しもうとするのだろうか」と戯れにいうと、女性は顔色を変えて、「互いに約束した言葉が未だ目の前にはっきりしているのに、あなたはどのようにそのようなことおっしゃるのか」といって、すぐさま身につけていた刃物を取り出して履物の片方をずたずたに裂いてしまった。またある日は、女性が白い上衣を縫っているとき、安がやはり前日のようにかからうと、女性は顔を覆って泣き、「私があなたを裏切ったのではなく、あなたが私を裏切りました」といって上衣を汚水の流れる溝に投げ捨てたので、安はその節操に心服し、愛情が一層深くなった。

夜訪ねていき早暁に戻る生活が数ヶ月続いたが、宰相がこ

の噂を聞いて大いに怒り、女性に「妻のいない下人のところに嫁に行け」と命じた。女性は毅然として「既にこのようになった上は、私はどうして操を守りましょうか」といって、嫁入り道具を自ら準備し、ご馳走を作って宮中の女官を皆呼んで食べさせたので、人々は皆彼女が改嫁すると思って彼女のことをあれこれいい、ある者は彼女を憎んだ。ところが女性はその日の夜、こっそりと他の部屋に入って首を吊って死んでしまった。安はこのことを知らなかった。

次の日、安が自宅にいると一人の女性がやってきて、「娘（妻）が来ました」というので、安は慌てて履物を逆さまに履いて門の外に出ると、女性は急いで「娘（妻）は昨晚亡くなりました」といった。安は笑って信じなかった。訳も聞かずに逢瀬に使う小屋に行くと、寝台を置いて服と布団で死体を覆っていた。安は失声痛哭し、隣家では皆この声を聞いて泣かない者はいなかった。

安は喪具を整えて殯屋を用意し、朝夕、霊前に酒食を供えて眠らなかったが、ある夜、ふと寝入ってしまった。すると妻が平素の姿で外から入ってきた。安は一緒に話をしたが、目覚めて部屋のなかを見回すと、寂寂として、風はすきま風を防ぐために柵のまわりに貼った紙を巻き上げ、寂しい灯火が明滅しているだけであった。安は泣き叫んで気絶したが、蘇生すると3日が過ぎていた。安は月光を浴びて足の向くままに一人歩くと、寿康宮の東門に出た。夜は既に三更であったが、化粧をして髪を大きく結って簪を挿した女性が先になったり後になったりして安についてくるので、彼がついて行くと、咳払いをしたり溜息をついたりする様子がすべて妻と同じであった。彼は大声で叫んで走っていき、ある小川に至ると、女性がまたその横に座った。安は振り返らずに自分の家に戻ったが、女性がまた門の外に立ったので、彼が大声で召使いを呼ぶと、女性は物陰に隠れて姿を見せなかった。安は心身がぼんやりして愚か者ようになり、気が狂った人ようでもあったが、1ヵ月あまりの後、鄭重な礼をもって妻の葬儀を行った後、間もなく彼も死んだ<sup>28</sup>。

夫への情愛の念を持ちつづけて自殺した女性の話であり、女性は死後も夫についてまわる。話の末尾に夫は「心身がぼんやりして愚か者ようになり、気が狂った人ようでもあった」とあり、妻の葬儀の後まもなく死んだということであるから、夫は死亡した妻につきまわられて死んだとみることができる。

なお、この話の最後には、夫は鄭重に妻の葬儀を行ったとあるが、この葬儀は儒教式の葬儀とみられる。仏教式の思考では、葬儀すなわち追善廻向（供養）は死者を善処へ転生させ、死者は苦しみから救われるとするが、儒教式の葬儀では情念をもつ

<sup>28</sup> 民族文化推進会、前掲書、123-125頁。

た女性に情愛の念を捨てさせ、安らかにさせることはできなかったようである。

先に紹介した情愛の念をもつ女僧が蛇に転生して恋い慕う男性につきまとい、遂に男性は死亡してしまうという話ともあわせて、朝鮮王朝期の説話では、情愛の念をもつ女性の死者は相手の男性（生者）を死亡させてしまうほどの恐ろしい存在であり、生者に対して主導権をもつ存在とみなされていたと考えられる。

#### (8) 葬ってくれた生者に報いる若い女性の死者

朝鮮王朝期の説話にみられる情愛の念をもって死亡した若い女性は、相手の男性につきまとい、遂には死亡させてしまうという恐ろしい死者である。その一方で、同じく若い女性の死者であるが、情愛の念をもつのではなく、飢饉や病気などで死亡した女性が、男性（生者）に自分を葬ってくれるように働きかけ、それを行ってくれた男性の恩に報いるという話もある。『於于野談』下巻に次のような話がある。

ある武士がいた。訓練院に行って矢を射ることを学び、日が暮れて帰る途中、一人の女に出会った。鮮やかな衣服と美しい容姿であったが、道端で心配そうな気色が顔色に満ちていた。武士は心を動かし、戯れに「日が暮れて道を行く人もいないのに、如何なる美女が一人でたたずんでいるのか」といった。女性はすぐに顔をあらため、春風の気運をつかみ取ったような嬌態で、「家に向かう途中で日が暮れ、道は遠く、とても心配しています」と答えた。武士が「もし道が遠くて心配なら、私と一緒に帰るのはどうか」というと、「私の名は終娘で、家は南山の麓の南府洞の突き当たりにあります。もし賢君子が卑しい者を捨てないでくださるならば、この上ない幸いです」と答えた。そこで手をひいて一緒に南府洞の寂しい裏町に入り、その家に行ってみると士族の大きな屋敷であった。表門の脇にある三番目の部屋が女性の部屋であった。四方の壁に図画を掛け、とぼり、簾、布団はとても美しかった。部屋に入って一緒に座り、壁の棚には柳でつくった器に干し肉と美味しそうなつまみが盛っており、枕の隅には清らかな酒を入れた白磁の壺と絵が描かれた杯があった。何回か飲食した後、情がとても深まったが、ただ身体は冷たく、その冷たさは湧き出る泉のようであり、時間が過ぎても温かくならなかった。武士が理由を尋ねると、女は「遠い夜道を行き、弱い身体には寒さがいっそうこたえたので」といった。武士は夜が明けて目覚めると、非常に喉が渇いていたので、帰途、隣家の娘が早朝、水を汲んでいるのを見て、水を飲ませてもらおうとした。その娘はいぶかしげに「あなたはどのようにして空き屋から出てきたのですか」といった。「終娘の家で寝て、出てきたのだ」というと、「その家では全員が病気で

死に、死体は放っておかれたままです。終娘も死んでから3日になるが、未だ麻布で遺体を包むこともできずにいるのに、私をからかうのですか」と答えた。武士は大いに驚き、戻ってみると、死体が縦横に横たわっており、一つの死体が三番目の部屋にあったが、それが終娘であった。食べきれずに残った酒とつまみが死体の横にあった。武士は、「死んだ娘が遺体を包んでもらうこともできないのを自ら悲しみ、私を意気のある者とみて、安らかに葬ってほしいと考えたのであろう」と思い、柩と喪輿を用意して郊外に埋葬し、酒肴を供えて祭祀をして自宅に戻ってきた。その日の夢に終娘があらわれ、「穢れた身をお捨てにならず、遺体を麻布で包み、埋葬もして下さったので、どうして幽と明の間があっても報わずにいられましょうか」と謝した。その後、武士は科擧に及第し官位は正三品以上にのぼった<sup>29</sup>。

また、同じく『於于野談』下巻には次のような話もある。

宣祖 27 年 (1594) は壬辰倭乱 (豊臣秀吉による文禄の役) の翌年である。全国が飢饉で、人が食べあい、飢えて死んだ死体が道に積まれていた。儒者の朴燁は乱を避けていて、ソウルの家に戻ると、ヨモギと草が家のなかに一杯であった。困窮と飢えて精神が虚ろとなり、市場の南方にいる親戚を訪ね、夜になって戻ってくる時、道で一人の若い美女に出会った。絹の衣服を着て、裳は赤かった。通りすぎるとき、燁は任侠の人であり、素早く「若い娘がどうして夜道を行くのか」と尋ねた。すると「待っているところがありますが、どうしようか躊躇しているのです」と答えた。「もし待っているところがあるならば、私を待たずに行きなさい」というと、「どうしてむずかしことがあるのでしょうか。ただ家の人に疑われるかと心配で、私の家に一緒に行くのは如何でしょうか」といった。言葉にしたがってその家に行くと、家の真ん中に召使いたちがみな臥して寝ていた。その娘が「お客を接待するものがない」といい、「隣の家で新しく醸した酒があるので、頼んで求めてきます」といって出て行った。漉していない酒を銅製の器に汲んで持ってきて、一緒に飲み、共に楽しく夜を明かした。早朝、夢がさめると、その娘の全身は冷たく、揺さぶって起こそうとしたが、眼を覚まさない。それは死人であった。燁がとても驚いて起きあがろうとしたとき、家のなかで臥している者を見ると、これらも死人であった。街の入り口に出ると大路に灯りが見えたので、門を叩くとそこは草鞋作り職人の家であった。燁が事情を告げ、「とても驚いて身体が震えているので、酒を求めて落ち着こうと思う」といった。家の主人が哀れに思い、かたわらに酒を入

<sup>29</sup> 金東旭校注、前掲書、227-231 頁。

### 韓国の説話にみる死者と生者の主導権

れた甕があったので、飲ませようとして銅製の器を探したが、見つからなかった。甕を覆っていた紙も穴が開いていた。燐はまた驚き、その器のある場所を告げて、一緒に昨夜の家に戻ってみると、それは士族の家であった。娘がいたが、飢えて病気になる死んだのであった。家の者もまたみな飢えて死に、うつむけに倒れた死体が互いに枕となっていた。燐は悲しみ、柩と喪輿を用意して、西の郊外に葬り、文章を書いて祭祀を行った。その後、燐は科挙に及第して、今は嘉善大夫として義州の府尹を務めている<sup>30</sup>。

2つの話とも、飢饉や病気で死亡して葬られずにいた若い女性の死者が、葬ってくれることを期待して男性（生者）に働きかけ、男性（生者）は鄭重に葬ってやったという話である。男性が後に出世したということであり、死者による報恩の話とみることができる。

先に考察したように、情愛の念を持って死亡した女性の死者は、相手の男性につきまとい、遂には死亡させてしまうほどの恐ろしい存在である。一方、飢饉や病気で死亡して葬られないでいる女性の死者は、自ら「意気のある」男性や「任侠の」男性を探し出して自分を葬ってくれることを望み、葬ってくれた男性の恩に報いる存在である。恋い慕う男性と結ばれずに死亡することも、飢饉や病気で死亡することも怨みになると思われるが、朝鮮王朝期の説話では、情愛の念をもつ死者は相手の男性を死亡させるほどの恐ろしい存在である一方、飢饉や病気による死者の場合は、葬られるならば生者に禍を与えることはなく、むしろ恩に報いる存在である。

また、これら2つの話のように、葬られずにいた死者が自分を葬ってくれることを生者に求めるという内容は、先に紹介した召使いに殺され、骸骨のまま川辺に捨てられて祀られずにいた死者の話と類似するようにみえる。しかし、殺されて骸骨のまま捨てられていた死者の話では、自分を殺した召使いを怨み、通りかかった生者に自分の息子に死の真相を伝えてほしいと依頼し、真相を知った息子はその召使いを殺し、死者の怨みは晴らされる。怨みを晴らすために積極的に行動する死者の姿が示されているとともに、死者による復讐談でもある。

他方、ここで紹介した飢饉や病気で死亡した女性の死者は、飢饉や病気による死が怨みであったとしても、怨みを晴らすべき相手はいない。自ら「意気のある」男性（生者）や「任侠」の男性（生者）を探し出し、葬ってもらいたいという希望を直接には伝えないが、一晩共に過ごした後、葬ってもらうことになる。ここでも自ら積極的に行動する死者の姿が示されている一方で、この話は葬儀を行ってくれた生者への報恩談でもある。

飢饉や病気で死亡した死者（若い女性の死者）は、鄭重に葬

ってもらえれば、その恩に報いる存在として語られている。

#### 4. まとめ

以上、先学が日本の説話を通じて考察した仏教が日本人にもたらした死者に対する思考を参照しながら、韓国の説話にみられる死者と生者との関係について検討した。本稿で検討したことを整理すると、次のようである。

先学による日本の説話の考察を通じた見解に基づけば、仏教は因果応報（善因善果、悪因悪果）、追善廻向（供養）、輪廻転生（後生善処）という論理を通じて、死者は生者への怨みを晴らそうとする恐ろしい存在ではなく、生前に自己が犯した悪行によって苦しんでおり、苦しみを脱するためには生者に救済を頼まなければならない存在であるという考えを日本人にもたらした。すなわち死者よりも生者が優位に立ち、主導権をもつという思考がもたらされた、という。

韓国においても、仏教が繁栄した高麗王朝期の僧侶が編纂した説話集には、日本の説話でみられるような死者と生者の関係が指摘できる話があり、高麗王朝期（さらには新羅王朝期も含めて）には仏教を通じて、死者よりも生者が優位に立ち、主導権をもつという思考がもたらされていたと考えられる。

一方、仏教が排斥された朝鮮王朝期に儒教の教養を身につけた知識人が編纂した説話集で語られている死者は、怨みを晴らすために積極的に生者に働きかける存在である。怨みの相手に直接復讐できない場合には、積極的に生者に働きかけて怨みを晴らす。また、第三者である生者の介入が死者同士の間での怨讐を晴らすのに妨げとなる場合には、その生者に怨讐の鋒先を向ける。このように死者と生者の関係では、死者が優位に立ち、主導権をもつ。このような死者の様相が語られるのには、仏教が排斥された朝鮮王朝期の説話では仏教の論理で死者が語ることがないためと考えられる。

仏教の論理から離れた朝鮮王朝期の説話では、生者に禍を及ぼそうとする死者や霊的存在を追い払うことができるのは儒教の教養を身につけた人物である。しかし、霊的存在を追い払うことができるほどの儒教の教養を身につけている人物であるか否かは、実際に霊的存在と対決したときでないとわからない。死者や霊的存在を屈服させることができれば、その人物は儒教の教養を身につけていることになり、屈服させることができなければ、儒教の教養を十分には身につけていないということになる。

仏教は追善廻向（供養）によって死者に対処するが、儒教では死者を祭祀する。儒教祭祀が対象とする死者は限定されており、自分が祀る必要のない親族の死者は自分に禍を及ぼす恐ろしい存在となる。また儒教祭祀で祀られている死者も、自身や子孫に害を及ぼそうとする者を厳しく罰する。祀られないでい

<sup>30</sup> 金東旭校注、前掲書、231-234頁。

る死者は正しく祀ってもらうために生者に働きかける。

また、情愛の念を持って死亡した女性の死者は、死後も相手の男性につきまとい、男性を死亡させる。一方、飢饉や病気などで死亡して葬られずにいる女性の死者は、自ら積極的に行動して自分を葬ってくれる男性を探し出し、葬ってくれた恩に報いる。

このように朝鮮王朝期の説話にみられる死者は、積極的に行動して自己の要望を主張する存在であり、場合によっては生者に罰や禍を与える存在である。したがって死者は生者よりも優位に立ち、主導権をもつといえる。

本稿で考察したことを踏まえて、今後の課題を指摘しておく。本稿では説話を通して死者と生者の関係について検討し、高麗王朝期の説話では日本の説話と同様の死者と生者の関係をみる事ができた。それに対して朝鮮王朝期の説話では、日本の説話にみられる死者と生者との関係とは異なるものがみられた。本稿でとりあげた高麗王朝期の説話集は僧侶によって編纂されたものであり、朝鮮王朝期の説話集は儒教の教養を身につけた知識人によって編集されたものである。したがって朝鮮王朝期の説話集で語られている死者と生者の関係についての考え方は、仏教の論理から離れたものであることが推測される。

ところで朝鮮王朝期には仏教は排斥されたが消滅したわけではない。儒教の教養を身につけた知識人からは排斥されたが、庶民階級の婦女子や、ときには知識人階級の婦女子も仏教と係わっていた<sup>31</sup>。朝鮮王朝期の仏教における死者と生者の関係についても検討する必要がある。

また、朝鮮王朝期には疫病で死亡した人々や戦死した人々に対して、国の祀典として厲祭や別厲祭が実施された<sup>32</sup>。これらの祭りに係わる死者と生者の関係も考察の対象となる。

さらには、現在の韓国でも巫俗は儒教祭祀で祀られない死者を扱うなど、儒教祭祀を補完する役割を果しているとされるが、朝鮮王朝期の巫俗にける死者と生者の関係についても検討する必要がある。

(提出日 令和3年9月30日)

<sup>31</sup> 野村伸一、『東シナ海文化圏—東の<地中海>の民俗世界—』(講談社選書メチエ) 講談社、2012年、216-232頁など。

<sup>32</sup> 金ユリ「戦場と祭場—朝鮮後期の別厲祭設行を中心に—」第2回東アジア宗教研究フォーラム『戦争と宗教研究』(主催・関西大学文学部)、2018年、159-162頁(韓国語文163-166頁)。